

# 鳥取大学研究成果リポジトリ

## Tottori University research result repository

タイトル Title	三好保徳博士の魚類・サツウムシ類における業績と記載種
著者 Author(s)	鶴崎, 展巨
掲載誌・巻号・ページ Citation	Takakuwaia , 28 : 17 - 22
刊行日 Issue Date	1996-12
資源タイプ Resource Type	学術雑誌論文 / Journal Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	<a href="https://repository.lib.tottori-u.ac.jp/11545">https://repository.lib.tottori-u.ac.jp/11545</a>

## 三好保徳博士の魚類・ザトウムシ類における業績と記載種

鶴崎 展巨 (鳥取大学教育学部生物学教室)

三好保徳博士がご自身の研究・教育歴を74歳の時点で回顧して書かれた随想 (三好, 1983) によると氏の生物関係の随想・論文は長短合わせて312編に上っている。それらは植物からヒル, 昆虫, ヘビ, 哺乳類にいたるまで多種多様であるが, それらの中でとりわけまとまった業績を残された生物群として, 多足類以外では植物, 魚類, ザトウムシ類が挙げられる。植物については手元の資料が乏しいので割愛することとし, ここでは魚類とザトウムシにおける氏の業績の一端を紹介したい。なお, 以下の記述は三好 (1983) と私が個人的に三好先生から伺った話の記録に基づくものである。

## (1) 海産魚類の分類学

上記の随想で述べられているが, 氏が研究の開始にあたって常に念頭においたことは, 人が研究しておらず, かつ自分の住む地域に適した生物群を研究対象に選ぶことだった (三好, 1983)。したがって, 1933年から1938年まで愛媛県八幡浜高等女学校に勤務されている間に, 有数の漁港をもつその地において海産魚類の分類を手がけられたことはごく自然な成り行きであったであろう。この時期には早朝5時に起きて魚市場を巡り珍しい魚類を集めることを日課としていた。豊後水道や日向灘からとれる珍魚の多くは食用対象魚ではないのでほとんどが無料でもらえたという。これらを材料に1936年から1960年までに約10編の海産魚類に関する論文を残されているが, とくに重要なのは初めての欧文論文 (英語) にあたる軟骨魚類板鰐類の3新種の記載論文 (三好, 1939) である。それらはいずれも日向灘で採集されたもので種名は下記のとおりであるが, これらのうち2種の種名は現在でも生きている (尼岡邦夫教授私信)。1987年の夏に三好博士のお宅を訪ねたとき, その頃出たばかりの魚類の大きな図鑑を広げられ, 「私のつけた学名がまだ生きているようだ」と嬉しそうに語られていたのを私は思い出す。

1. *Eugaleus hyugaensis* MIYOSI, 1939 ツマグロエイラクブカ

[現在 *Hypogaleus hyugaensis* (MIYOSI, 1939)]

2. *Dasyatis maculatus* MIYOSI, 1939 マダラエイ

[現在は *Taeniura melanospila* (BLEEKER) のシノニム]

3. *Dasyatis matsubaraei* MIYOSI, 1939 ホシエイ

最後の種の種小名は当時, 研究に関するアドバイスを受けた海産魚類分類の大家, 松原喜代松博士に因んでいる。

この時期, 自宅の庭に魚類の標本を置いていたところ, 異臭がするとの通報で警察官が取り調べにきたことがあった。庭に死体でも埋まっているのではないかと勘違いされたのである。1938年に松山に転勤になってからは松山市の三津の魚市場にしばらく通われたらしいが, 瀬戸内の浅海では八幡浜で得られたような珍しい種はいっこうに得られず, 研究をあきらめることになった。

## (2) ザトウムシ類の研究

松山に転勤になって2年目となる1939年、研究対象をザトウムシ(当時、本類の総称としてはメクラグモの名が使用されていた)に変えることを決意。氏が30歳のときである。この年の夏には、この類の染色体や分類の研究を当時研究室の学生であった鈴木正将博士とともに開始していた広島文理大学の佐藤井岐雄博士(サンショウウオの分類学的研究やサソリの染色体研究で有名。1945年8月原爆にて逝去)を訪ね、研究についてのアドバイスを受けている。そのときに ROEWER (1923) の *Weberknechte der Erde* というドイツ語による世界のザトウムシ類の大著のモノグラフを紹介された。本書を読むために独学でドイツ語を修得、翌年1940年12月5日には、その総論の部分の翻訳を謄写印刷している。また1940年の夏には佐藤井岐雄博士の伴で島根県隠岐島へ採集旅行にも出かけている(三好, 1962)。

ザトウムシ研究のフィールドとしたのは松山市南方にそびえる皿ヶ嶺(標高1271m)の北面中腹標高約900mにある風穴(かざあな)と呼ばれる場所のスギ林であった。洞穴ではないが、岩の隙間から冷風の吹き出すガレ場があるためにこの名がある。ここには、かつて村人が食物の貯蔵に利用したと思われる岩室が地表を掘り下げて作られているが、おそらく三好博士がザトウムシを調査されていた時分からすでに存在していたものと思われる。当時は松山市の中心部(湊町)から重信川に接する森松まで伊予鉄道の郊外電車がのびており(これは私が小学生の低学年の頃まではまだあった)、これで森松まで行きそこから風穴までは歩いたとお聞きした。森松から風穴までは片道約15km、標高差で900m以上あり、全行程徒歩での往復は今日では想像しがたい難業である。ここに1941年春から1944年春までの3年間だけで37回も通った(三好 1944a)というから驚く。

この皿ヶ嶺風穴で採集したザトウムシ類の観察に基づき、1941年を皮ぎりに1944年まで主として東亜蜘蛛学会の会誌 *Acta Arachnologica* に精力的に論文を発表された。皿ヶ嶺から新種として記載されたザトウムシは次の3種である。

1. *Sabacon pygmaeum* MIYOSI, 1942 コブラシザトウムシ
2. *Sabacon satoikioi* MIYOSI, 1942 サラアゴブラシザトウムシ
3. *Peltonychia japonica* MIYOSI, 1957

[現在 *Nippononychus japonicus* (MIYOSI, 1957) ニホンニセタテヅメザトウムシ]

最初の2種はブラシザトウムシ(*Sabacon*)属(現在は*Taracus*属とともにブラシザトウムシ科を形成)に属している。本属の東アジアにおける最初の記録は中国東北部であったが(鈴木, 1941)、日本からはこれらが最初の報告となった。当初の和名はそれぞれコアゴザトウムシ、サラアゴザトウムシであったが、細毛が密生しブラシ状に見える触肢をもつことから現在本属はブラシザトウムシの名で呼ばれており、和名もこれに対応させている。後者の種小名は佐藤井岐雄博士、和名の“サラアゴ”は雄の鉗角第1節の上面に皿状の小丘があることと皿ヶ嶺産であることをかけての三好先生による命名である。コブラシザトウムシは現在、箱根地方以西の本州、四国、九州に広く分布していることが知られている。一方、サラアゴブラシザトウムシの分布は現在のところ四国のみであるが、本州や九州に分布するイマムラブラシザトウムシ *Sabacon imamurai* SUZUKI とは地理的代替種の関係にあると考えられる。

最後の種は当初ヨーロッパに分布するタテヅメザトウムシ科の *Peltonychia* 属と判断されニホンタテヅメザトウムシの和名で呼ばれた。東アジアにおけるこの仲間(タテヅメザトウム

シ上科)の最初の記録になる。その後、日本や朝鮮半島から同属の別種がいくつか鈴木正将博士によって追加されたが、1970年代に入って北米でなされた本類の分類の改訂を受けて、日本と朝鮮半島の本類は真のタテヅメザトウムシ科ではなく、ミツヅメザトウムシ科 *Triaenonychidae* に属するものであることが明らかにされ (SUZUKI, 1975), それとともに属名、和名の変更もおこなわれた。本種は現在、四国と中国地方西部のいずれもブナ帯以上の山地に知られている。橙黄色の可憐なザトウムシで上記ブラシザトウムシとともに三好先生には思い出の深い種であったことと推察される。

しかしながら、三好博士のザトウムシ類における研究業績は記載分類そのものよりもむしろ当時ほとんど未解明であった生活史を詳細に調べたことでより評価されるべきと私は考えている。ニホンアカザトウムシ *Pseudobiantes japonicus* の生活史や交尾 (三好, 1941b, c), サスマタアゴザトウムシ *Nipponopsalis abei* (三好, 1942c. 当初、本種はヨーロッパのアゴザトウムシ科アゴザトウムシ *Ischyropsalis* 属とされたが、現在では系統的には全く異なるニホンアゴザトウムシ科 *Nipponopsalididae* として扱われている), サラアゴブラシザトウムシ (三好, 1944a) などの生活史や成長にともなう形態変化の詳細な報告は、記述の方法が今日の研究論文のスタイルにはなじまないとはいえ、その内容は今でも参照価値を全く失っていない。和文で書かれたためにこれらの論文が欧米の研究者にはあまり引用されていない点が惜しまれるが、私は「三好博士の論文にはサスマタアゴザトウムシの幼体触肢先端の2節にある末端部がふくれる特殊な毛の存在など重要な知見が多く含まれている」というコメントを Jürgen GRUBER 博士 (ウィーン自然史博物館) から聞いたことがある。

このように順調に軌道にのり多くの成果を挙げていたザトウムシ研究であるが、1943年3月下旬には手紙で高島春雄氏に多足類への転向を相談、その6月9日には松山市にて高桑良興博士と初対面し以後、多足類研究に進むことになった (三好, 1962, 1983)。多足類への転向については、回顧録には戦況の悪化で欧米の文献が全く入手不可能となり思うような研究ができなくなったためと書かれている。同様の話を私も三好博士より直接二度ほど伺ったことがある。

### 【三好保徳博士魚類関係業績リスト】

(ページ数の記入のないのは三好保徳発表論著目録 (1956年9月謄写刷自刊) からの引用で直接確認していないもの。1956年以降については完全には拾いきれていない)

三好保徳, 1936. 伊予産魚類 (1) 100種. 愛媛教育, 昭和11年4月号.

三好保徳, 1936. 伊予産魚類 (2) 100種. 愛媛教育, 昭和11年10月号.

三好保徳, 1937. 魚類研究の手引. 愛媛教育, 昭和12年5月号.

三好保徳, 1939. サメ研究余録. 松山高女校友会誌, 昭和14年3月.

Miyosi, Y., 1939. Description of three new species of Elasmobranchiate fishes collected at Hyuga Nada, Japan. *Bull. Biogeogr. Soc. Japan*, 9 (5): 91-97.

三好保徳, 1940. 日向灘及豊後水道産板鰓類, エドアブラザメ科, ネコザメ科, 及トラザメ科 (I). 植物及動物, 8 (3): 552-558.

- 三好保徳, 1943. 日向灘及豊後水道産板鰐魚類. トラザメ科・テンダクザメ科. 動物学雑誌, **55** (8): 292-300.
- 三好保徳, 1951. キハツソクの幼魚. 採集と飼育, **13** (4): 108.
- 三好保徳, 1958. 豊後水道及び日向灘産魚類 (1). 兵庫生物, **3** (4): 1-4.
- 三好保徳, 1960. 豊後水道及び日向灘産魚類 (3). 兵庫生物, **4** (1): 66-67.

#### 【三好保徳博士ザトウムシ類関係業績リスト】

- 三好保徳, 1941a. *Ischyropsalis abei* Sato et Suzuki の一奇形. *Acta arachnol.*, **6** (1): 10-12.
- 三好保徳, 1941b. 有鉤類の歩肢の機能と形態について. *Acta arachnol.*, **6** (2): 30-33.
- 三好保徳, 1941c. 有鉤類 Laniatores の繁殖と成長に伴う形態の変化. *Acta arachnol.*, **6** (3): 98-107.
- 三好保徳, 1941d. 小さいザトウムシどもよ. 四不像, (12): 94-95. [皿ヶ嶺におけるザトウムシ調査の一こまを綴ったエッセイ]
- Miyosi, Y., 1942a. Eine neue Art von *Sabacon* aus Nippon. *Zool. Mag. (Tokyo)*, **54** (4): 165-166.
- Miyosi, Y., 1942b. Eine neue (zweite) Art von *Sabacon* aus Nippon. *Acta arachnol.*, **7** (2): 49-53.
- 三好保徳, 1942c. サスマタアゴザトウムシ *Ischyropsalis abei* Sato et Suzuki の生長に伴う形態の変化. *Acta arachnol.*, **7** (3/4): 109-120.
- 三好保徳, 1942d. 閉気門類 (Eupnoi) の一種の交尾について. 植物及動物, **10** (10): 947.
- 三好保徳, 1944a. サラアゴザトウムシ *Sabacon sato-ikioi* に関する2, 3の知見. *Acta arachnol.*, **9** (1/2): 33-43.
- 三好保徳, 1944b. 皿ヶ嶺の盲蛛目とその越冬について. *Acta arachnol.*, **9** (1/2): 44-50.
- Miyosi, Y., 1957. Eine bemerkenswerte neue Art von Travuniidae. *Acta arachnol.*, **14** (2): 63-66.

#### 謝辞

三好博士記載の魚類の学名については北海道大学水産学部の尼岡邦夫教授にご教示いただきました。また、一部の文献は湊宏博士のご厚意により入手することができました。厚くお礼申し上げます。

#### 参考文献

- 三好保徳, 1962. 高島春雄先生を悼む. *Atypus*, (26/27): 9-11.
- 三好保徳, 1983. 私は50年以上生物の教師をしています. 愛媛高校理科創立20周年記念特集号, pp. 1-4.
- 鈴木正将, 1941. 満州及び北支那の盲蛛類 (I). 日本生物地理学会会報, **11**: 15-22.
- Suzuki, S., 1975. The harvestmen of family Triaenonychidae in Japan and Korea (Travunoidea, Opiliones, Arachnida). *J. Sci. Hiroshima Univ. (B-1)*. **26**: 65-101.

## 【追記】

三好博士の戦前のザトウムシ採集のための皿ヶ嶺登山は森松駅を起点としたものと私は思い込んでいたが、つい最近、松山へ帰省したおりに地図を眺めていて、皿ヶ嶺登山には松山市駅と温泉郡重信町の横河原（よこがわら）を結ぶ伊予鉄道横河原線の見奈良（みなら）駅で下車するほうがずっと近いことに気づき、釈然としない思いを抱いていた。横河原線が戦前はまだ開通していなかったのかもしれないと考えたが、両親に聞くと戦前からあったとの返事である。

ところが、このほど湊宏博士のご厚意で入手できた「ヤハズサウの花」と題するエッセイ（四不像, No. 12, pp. 4-5, 1941年）中の記述で、三好博士がまさしくこの見奈良を登山起点とされていたことが判明した。森松からという私の記憶は、勘違いか聞き違いによるものだったようである。見奈良駅から皿ヶ嶺の風穴までは、途中、私が高校時代に利用した上林（かんばやし）という登山口（1970年代の私の高校時代にはここまでバスが通っていた）を経由して片道約8kmである。ただし、標高差は依然として850mほどあり（上林は標高約300m）、楽な行程でなかったことは確かである。

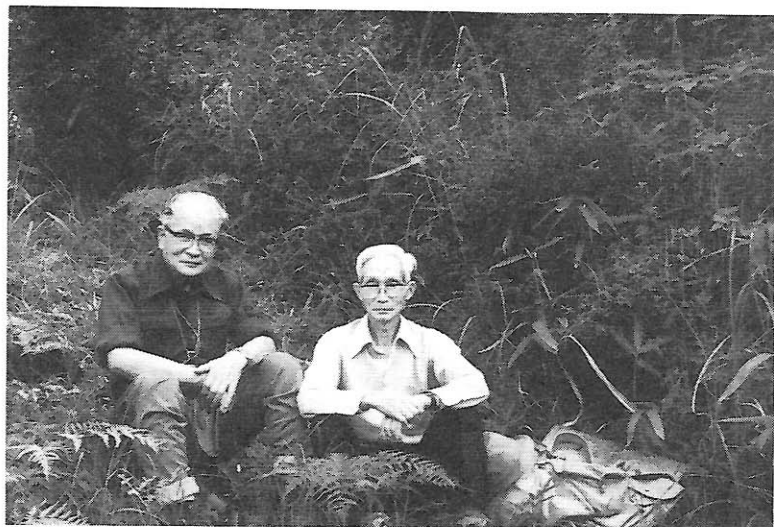
なお、このエッセイは著者名が杉本探となっており、私が今回作成した三好博士著述目録の草稿の点検中、『四不像』のバックナンバーに直接あたってその事実を見いだされた湊宏博士は初めこれは別人の作ではないかとの指摘を私に寄せられていた。しかしながら、本エッセイは、三好保徳発表論著目録（1956年9月謄写刷自刊）に掲載されていたところから私がある存在を知り今回作成した博士の著作目録のデータベースに入力していたものである。もしそれが事実とすれば、編集あるいは印刷の過程で著者名が誤って別人と入れ替ったのかも知れない。引き続き号に訂正等が掲載されていないかどうか、湊博士に再度確認作業をお願いした。湊博士からの回答は、その号に引き続き数号の編集後記にそのような訂正は見つからなかったというものであった。しかしながら、氏が同時に送って下さった杉本探著の本エッセイのコピーを読んで、私はこれが三好博士の著作であることを確信した。最後に『（16.8.14）』と脱稿日付が併記されている本エッセイは、皿ヶ嶺のクモ（本エッセイにはメクラグモではなくこう書いてある）採集を終えて下山して見奈良駅での電車待ちの休息中に見たヤハズソウをモチーフとしているが、昭和16年の時点でクモの採集のために皿ヶ嶺に登山していた植物にも特別の嗜好を有する人というのは三好博士を除いて考えられない。また、郷愁や一抹の哀愁を漂わせる筆致も三好博士独特のものである。つまり、杉本探というのは、『スギの根本を探っている』様子（ザトウムシ採集における典型的行動様式である）からとったペンネームだったと判断できる。

本件に関して再三にわたってご助力いただいた湊宏博士に厚くお礼申し上げます。

（1996年5月18日）



1982年7月5日 愛媛県上浮穴郡小田町突合の山



恐らく上の写真と同日・同じ場所付近  
愛媛植物研究会会長（当時）山本四郎氏とともに